

## 征西將軍宮 懷 良 親 王 (かねよし、かねなが)

元徳元年(1329)？-弘和3年(1383) 九州南朝の征西將軍宮。後醍醐天皇の第11皇子。従前は懷良を「かねなが」としていたが、現在では「かねよし」と訓読している。

### 〈九州上陸の苦難〉

延元元年(建武3、1336)10月、後醍醐天皇は足利尊氏の講和を受け入れ叡山を下りたが、この時に諸皇子を各地に分遣し再挙を図ろうとした。九州には幼年の懷良親王が、派遣されることになった。その時期については、延元元年同3年同4年などの諸説がある。五条頼元(よりもと)以下12人を補佐役につけ、京都を出発。紀伊から瀬戸内海を通り、讃岐(さぬき)を経て、伊予の忽那島に着き約3年間在島。当時の北部九州は幕府方の勢力が強く日向を経て、興国3年(康永元、1342)5月1日に薩摩に上陸し、谷山隆信の居城谷山城に入った。九州上陸は熊野や瀬戸内海の水軍の協力なくしては、到底不可能であった。

### 〈菊池氏を頼って九州制圧〉

正平2年(貞和3、1347)に谷山城を出発、肥後葦北を経て、翌年正月宇土に着き、次いで益城(ましき)郡御船城を経て菊池武光の本城に入り、ここを九州経営の拠点とした。親王が菊池氏を頼ったのは、九州における有力な南朝支持者であり、強力な軍事力を保持していたからである。早速、筑後征討にのぞみ、幕府方の鎮西管領(九州探題)一色範氏と一進一退を繰り返した。貞和5年に足利直冬が九州に入り、九州は宮方(南朝方)幕府方(北朝方)直冬方(佐殿方)に分かれ、三巴の熾烈な抗争が展開された。正平7年(文和元、1352)11月に直冬は長門に逃走、10年10月一色範氏も九州を退去した。14年(延文4、1359)には少弐(武藤)頼尚を敗り、16年筑前から少弐氏を駆逐、ついに律令時代の九州統治のための政庁がおかれていた大宰府に入った。親王が九州に上陸から19年目にして、ここに懷良親王を首班とする征西府(征西大將軍の政務機関)が誕生した。以後、11年間に及ぶ南朝勢力の全盛時代を迎えるのである。親王は大宰府の在庁組織を把握し、菊池氏の軍事力を背景に、所領の安堵行賞訴訟裁断など、公家の奉行人を通じて執行した。

### 〈大友氏攻略と宇佐〉

正平10年(文和4、1355)懷良親王は豊後国攻略のため10月2日に日田へ向けて出発、玖珠由布狭間を経て豊後府中(大分市)に入り、速見郡大神(おおか)から豊前国宇佐城井(きい)、筑前国殖木を通り博多に侵入した。この時、大友氏時(うじとき)や宇佐大宮司(だいがうじ)らは親王軍に降参。11年8月15日以前に、宮成公居は南朝方に請い大宮司に補任(ぶにん)された。13年(1358)2月、懷良親王は宇佐宮に白鞆入剣(国重要文化財)を奉納。その銘文に「為將軍宮御代官□□□奉施入八幡宇佐宮権少僧都信聡 正平十三祀戊戌二月日」と陰刻されている。大友氏時は間もなく離反し高崎城に籠城、親王は菊池武光とともに延文3年(正平13年)12月筑後から豊後に入り狭間を攻め、高崎城を攻略した。大友軍救援のため大野荘志賀村(朝地町)の志賀氏房が駆けつけて背後を襲撃し、高崎山の西麓赤松で奮戦。親王軍は退却し、大友軍は玖珠郡八丁辻まで追撃した。翌年、親王軍は志賀村の志賀頼房(よりふさ)の城を攻め、高崎城も攻撃した。康安2年(1362)菊池武光が豊後府中に攻め入り、高崎城を攻めたが落城させることはできなかった。応安4年(建徳2、1371)今川了俊の子義範が高崎城に入ると、菊池武光は伊倉宮(いくらのみや)を奉じて、8月6日から翌年正月2日にかけて百余度も当城を攻めたが、陥落させることはできなかった。懷良親王の文書が、南朝方の宇佐大宮司到津公連によって建立された、大楽寺(宇佐市)に残されている。正平17年(1362)5月23日付けの令旨で、懷良親王は大宰少弐頼澄に大楽寺領の豊前国上毛郡節丸名以下散在田地の武士の押妨(おうぼう)を止め、寺家に返すよう命じた。しかし、実行されず翌年5月23日に再度、同地での垂水宮内大夫入道大塚孫次郎荒巻新兵衛入道柳田兵庫入道原孫太郎等の違乱を停止し、大楽寺に返付するよう少弐頼澄に指示している。

### 〈衰退した南軍〉

懷良親王が大宰府に入った年に、將軍足利義詮は斯波氏経を九州探題として派遣した。彼は豊後の大友氏を頼ったが、南朝軍の勢力に圧倒され京都へ引きあげた。貞治4年(1365)、渋川義行が九州探題に任命されたが、九州に上陸せず京都へ引き返した。建徳2年(応安4、1371)今川貞世(さだよ)が九州探題として九州へ下向、彼は慎重な作戦をたてながら北朝勢力の回復をめざし、次第に大宰府包囲網を形成していった。文中元年(応安6年)8月菊池武光の軍勢は撃破され、ついに大宰府は陥落した。武光は懷良親王とともに筑後高良山へ退き、さらに菊池へと撤退した。了俊のすぐれた戦略により、南朝勢力の衰微は決定的であった。親王は征西將軍職を退き、筑後矢部(福岡県八女郡矢部村)に隠退、弘和3年(永徳3、1383)3月27日、親王は50余歳でこの地に没したという。

参考文献 『宇佐宮大楽寺』